

ギリシア問題の所在

盛田 常夫

問題の本質

ギリシアのデフォルトが現実味を帯びている。もっとも、デフォルトよりも、その次に来るギリシアのユーロ圏離脱がユーロ圏およびEUの今後の発展にとって、大きな試金石になる。これまでEUもユーロ圏も拡大を続けてきたが、その逆の動き、つまりEUやユーロ圏からの除名や離脱の経験をもたない。金融債権債務の処理が複雑だから、EUからの離脱よりユーロ圏離脱の方が、比べものにならないほど難しい。だから、これまで何度もギリシア切り捨て論があっても、ギリシアのユーロ離脱が現実化することはなかった。

しかし、一つの共同体が永遠に同じ存在であり続けることはできないし、大きくすることだけを自己目的とする組織は内部に抱え込んだ矛盾を解決できない。共同体がその目的を維持しつつ、加盟メンバー国の可能な限りの公平性を維持しようとするれば、共同体の規範を守れないメンバーを除名するなり、離脱させる仕組みを持たなければならない。その仕組みを持たない組織は、常にその内部に問題を抱え込む。したがって、一つの共同体が政治経済の変動に柔軟に対応し存続できるためには、許容しがたいほどに限度を超える行動をとり続けるメンバーを共同体から離脱させるシステムをもっていることが必要だ。ユーロ圏を拡大していくことがユーロの歴史的使命だとしても、その過程の中で、共同体基準を守れないメンバーを永遠に抱え込んだのでは、拡大を成功裏に実現することができない。離脱の仕組みをもち、変化に柔軟に対応できるシステムでなければ、システムの存続自体が危ぶまれる。

したがって、ギリシアのユーロ圏からの離脱は、ユーロ圏という共同体の組織としての柔軟性と存続性を試す大きなチャレンジである。もちろん、ユーロ圏離脱はギリシア経済に大きなショックを与え、通貨の大幅切り下げを伴い、国民生活を大幅に切り下げることになるが、ユーロ圏が相互扶助組織でない限り、どこかでその決断を下す以外に、問題の解決はない。

ゲーム戦術にはまり込んだギリシア財務相

今年1月に政権に就いたギリシアのチプラス政権は、緊縮政策にたいする国民の反対をバックに、対EUおよび対ユーロ加盟国にたいして強硬姿勢を貫いてきた。この強硬策にもかかわらず、新政権発足当初、欧州首脳は若い政治家の登場にある種の期待を示し、共通の解決策を見つけることができるのではないかと歓迎した。しかし、その後のチプラス政権首脳の発言は、ユーロ圏首脳の理解を得る努力を示すより、逆に彼らの善意を無にし、神経を逆なでするものだった。とくに、財務相に就いた経済学者のバルファキスは、イタリアの財政状況を批判し、ギリシアに借金を返済できる金はないなどとけんか腰の態度を貫き、挙げ句の果てにはドイツの戦後賠償問題まで絡ませてきた。この横柄な態度に、ユーロ各国首脳

が呆れてしまい、ギリシアはバルファキス財務相を表舞台の交渉から退かせることを余儀なくされた。借金していながら、謙虚に振る舞えない政治家は失格という烙印を押されてしまった。

さらに、ユーロ加盟国の中でも、ギリシアより年金受給額や賃金水準が低い国からは、ギリシアへの譲歩は資金を垂れ流すだけだから、到底受け入れられないという反発が強まっている。バルファキス財務相はもともとゲーム理論の専門家である。ゲーム理論に基づく交渉戦術で、ユーロ離脱をちらつかせれば、債務の返済の猶予や削減を得られるのではないかと考えた節がある。しかし、問題は交渉術で解決できるような性格のものではない。事はギリシア経済の持続可能性の問題である。一時の交渉術で解決できるほど単純な問題ではない。にもかかわらず、強硬な態度で出れば、相手は譲歩せざるを得ないと考えていた。ここに、現代経済学が持つゲーム理論の絶対的限界を見ることができる。問題の本質をたんなるゲーム戦術と捉える浅はかな経済学者が、そのまま政治家として幼稚で未熟な対応をしてしまったために、総スカンを食ってしまったというのが事の顛末だ。

イデオロギーに頼る欧州左翼の弱点

ギリシア政権のもう一つの誤解は、問題をイデオロギー対決へ持ち込めば、欧州ではなんとかなるといふ旧左翼的発想の間違いである。

欧州議会では政策対応を軸に、国を横断して、議会会派が形成されている。いわゆるキリスト教系保守（右派）と社会民主主義系（左派）が大きな会派として存在し、その間に小会派がいくつか存在する。欧州では第二次世界大戦時の反ファシズム運動から、伝統的に左派と右派の識別が行われており、冷戦終了後も、「左翼」と「右翼」という政治的識別が根強く存続してきた。

しかし、体制転換以後、実際問題として「右」と「左」の区別がほとんど意味を失っている。旧社会主義国で政権政党にある社会民主主義系政党は、腐敗と汚職にまみれ、挙げ句の果ては社会主義とは縁もゆかりもない市場原理主義に身を任せるなど、昔の左翼の名残は一つもない。逆に、ほとんどの体制転換国では、右派と称される反対派が旧社会主義時代の社会保障を存続させる力になっている。だから、「右」とか「左」という区別には何の現実的意味もなくなっている。

ドイツの社会民主党党首だったシュレーダーなどは、首相在任中にロシアに接近し、政治家を辞めた途端に、ガスパロムの顧問として法外な高給を得る職に就いた。この事例のように、ヨーロッパでは「右」も「左」も経済的権益に非常に弱いし、国民もそのような政治家の行動をことさら非難するわけでもない。欧州では右も左も、政治家は役得を得るものだと考えられている。

左右の区別のような政治的な色分けがないと、欧州議会でのロビー活動を相互に行うことが難しい。だから、欧州議会議員は、必ずどこかの会派に属し、自らの投票行動を決めるようにしている。ただ、欧州の伝統として、反ファシズムや人道支援は「左翼」の錦の御旗

になっており、このテーマを掲げれば会派が結束するという習慣がある。ハンガリーでも、腐敗と汚職の社会党ジュルチャーニイ政権がじり貧に落ち込み、自らの延命を図るために、小さな「ユダヤ人」差別問題を取り上げ、欧州の左派に呼びかけ、ブダペストで「反ファシスト」大行進を組織したことがあった。「反ファシズム」と叫べば、欧州左派の政治家は動かざるを得ないからである。

ハンガリーの現在の「右翼」政権にたいして、国内での支持がなくなったハンガリーの「左翼」は国内でのキャンペーンを諦め、欧州議会やドイツを中心に反ファシズムや反独裁のキャンペーンを張って、国の外からハンガリー政権に圧力をかけている。実際、元社会党党首ジュルチャーニイが所有するコンサルティング会社が、「EU 補助金の実施状況を考査する事業」の補助金を受けたことが暴露された。これなどは「左派」の人脈を使った政治家への実質的な補助金提供であり、EU が原則的に禁止している政党補助金支出にあたる。

今回のギリシア危機でも、「反緊縮」やドイツの戦後賠償を声高に叫べば、欧州議会の「左派」の支援を得られると踏んだのだろう。しかし、もはやイデオロギーで経済問題を解決する時代は終わった。旧ユーゴスラビアのように国が分裂した諸国や旧社会主義国の年金受給額は端金程度のものである。だから、ユーロ圏に入っているというだけで、身の丈に合わない年金支給を続けるのは欧州内部で賛同を得られない。返済の見通しがきかない資金を垂れ流すことなど、もう欧州諸国にはその余裕がなくなっている。

ギリシアやイタリアへ上陸した難民が急増し、その一部がセルビア国境を越えてハンガリーに流入している。これにたいして、ハンガリー政府はイデオロギー的に難民排除を実行しようと、外国人排除とも受け取られる「スローガン」看板を設置したのにたいし、「左派」はそれを批判する募金を始め、対抗看板を設置している。しかし、難民問題はそのようなイデオロギーを争う問題ではない。大量難民の受入は経済的基盤が弱いハンガリーにとって大きな経済的負担を強いるだけでなく、かりにハンガリー国内に難民が留まった場合、どのように難民を同化させるのかという難しい問題である。それはギリシアやイタリアでも同じであり、さらに難民が目指す最終目的地となる EU 先進国であるドイツやフランスの問題でもある。EU 全体が問題解決を迫られているものである。無条件の人道支援というようなイデオロギーで解決できる問題ではない。

欧州共同体の矛盾

EU は最初から国力の差を前提に、それを縮めることで欧州の一体化を図ろうとしている共同体だから、経済的格差の存在は前提されている。補助金を与えて格差を縮め、経済的先進国も経済的弱小国も基本的に同質の法制度におくことによって、社会の同質化を図るものだ。しかし、弱小国にも先進国と同様な労働規制や市場規制を導入すれば、経済的発展の原動力が抑制されてしまう。経済的弱小国の勤労者は、先進国の勤労者より勤勉に働くことによって初めて、経済格差を縮めることが出来るはずだが、EU の労働者保護政策によって、それぞれの勤労者の休暇制度や労働のあり方がかなりきつく制限されている。補助金で経

経済格差を埋めることには限りがある。それぞれの国の自助努力が必要なはずだが、その国ごとの自助努力に制限がかかれば、いつまで経っても経済的格差は縮まりようがない。これが現在の EU が抱える基本的な矛盾である。

他方、ユーロ圏の矛盾は、ユーロ拡大を急ぐあまり、経済的発展度の違う国の参入をあまりに簡単に容認したところにある。通貨統合においては、経済的発展の均質性や経済運営の健全度が要求されるが、ギリシアはユーロ加盟にあたって、GDP 数値の改ざんを行い、財政赤字の数値を小さく見せて、ユーロ圏加盟を実現した。その改ざんが発覚した後も、ユーロ圏はギリシアにたいして、有効な措置を取らなかった。その付けが今になって回ってきている。

単一通貨ユーロ圏はいまだ実験段階にあり、経済運営や経済発展度合いから見て、基準から恒常的に乖離している国をどのように処理するのか、大きな混乱なしに離脱という究極的な措置を取り得るのか。今まさに、それが試される時が来ている。離脱をただら引き延ばしても、最終的な解決が遅れるだけである。